詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

母の日や実家は縁側より入る　横浜市　正谷　民夫

△評▽玄関から入らぬ行動に親しみと懐かしさが表れている。家構えや間取りまで見えてくる。茶の間で迎えてくれるお母さん。

指先を細め納めし雛調度　富田林市　尾﨑　昌子

△評▽細やかなあれこれを壊さぬようにしまう時の、心づかいが伝わる。実感のこもった表現。

初花やポニーテールの捕手投手　姶良市　井之川健児

下萌や日向日陰にかかはらず　島　根　高橋多津子

音もせず然れど止まざる花菜雨　横浜市　斎藤　山葉

啓蟄の隣の家も庭いぢり　松山市　井上　保子

雪解水滲みたる木戸の重さかな　盛岡市　福田　栄紀

耳立てて風を聞きをり春の駒　横浜市　相沢恵美子

花影に看板競ふ吉野葛　伊勢市　奥田　豊

春風に押されて軽きペダルかな　名古屋市　辻村　俊策

井上　康明　選

惜春を歩き緑に追ひつけず　相模原市　小山　鞠子

△評▽春を惜しむ詠嘆と、芽吹きのせきたてられるような印象が混ざり合う。春の終わりの移りゆく季節感が伝わってくる。

病院の待合室につくしんぼ　久留米市　持地　恒美

△評▽幼子が持って来たのだろう。子が握る2、3本のつくしを、大人たちが見つめている。

囀や旅路の簡易郵便局　臼杵市　村上　玲子

ソフトウエアアップデートのこどもの日　伊丹市　噂野アンドゥー

クレソンへ鉄工場の火花散る　富士宮市　渡邉　春生

師の影をすこしはなれて青き踏む　福山市　武藤　弘海

土の春老いには老いの匂ひあり　高松市　島田　章平

クッキーの焼きたての色しやぼん玉　宇陀市　泉尾　武則

家々に井戸ある暮し若葉光　大　阪　芹澤　由美

宣長の空想地図や麗けし　伊賀市　福沢　義男

片山由美子　選

雑踏のひとりとなりぬ春の暮　野田市　押江　成行

△評▽雑踏にのみ込まれ、自身の存在が薄れていくような孤独感。「春の暮」にほかの季節とは違うそこはかとなさがただよう。

花びらの剝れ落ちるやチューリップ　小林市　黒木　暢

△評▽何日か開いたり閉じたりを繰り返すうちに、はらりと落ちる花びらを即物的にとらえた。

太陽の塔ぽつねんと春の雲　和泉市　松浦　太志

地球儀を回して払ふ春埃　米子市　岩水　節子

塗り直す横断歩道春兆す　北広島市　水口　茂

ささやきのごとき水音茨の芽　さいたま市　金井　裕子

朝掘りの筍届く日曜日　神奈川　新井たか志

立てる今歩ける今を青き踏む　和歌山市　曽根　澄子

かやく飯匂ふ八十八夜かな　伊丹市　奥本　七朗

うどん屋の看板の古り燕の巣　伊勢市　奥田　豊

小川　軽舟　選

雁供養古き手紙をともに焚き　葛城市　山本　啓

△評▽北へ帰れず死んだガンの供養に風呂をたく。ゆかしい風習に古い手紙への思いが余情となってひろがる。

田畑の中に墓あり揚雲雀　甲府市　山田　敦子

△評▽この田畑とともに生きた先祖の墓。作者もいずれはそこに骨を埋めるのだろうか。

若駒や風にたはむれ日にまみれ　平塚市　高橋　佳代

赴任地の浮き桟橋やつばくらめ　仙台市　引地　恵一

病室のうすきスリッパ春寒し　東　京　徳原　伸吉

晩節のこころよ遊べしやぼん玉　浦安市　上村実川喜

桜咲く新幹線の車両基地　塩釜市　高橋　永喜

オムライスが自慢の老舗チューリップ　甲府市　村田　一広

汽車と呼ぶ人も僅かに百閒忌　横浜市　吉野　暢

麗日や家持ちなれど一人なり　周南市　松岡　哲彦

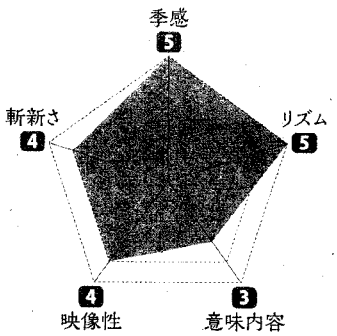
俳句てふてふ

注目の一句

山道はでこぼこだらけ春だらけ　マチ

円堂実花

チャートで採点



季語「春」の一句。言葉やフレーズを繰り返す技法、リフレインが用いられています。17音しかない俳句では難しいとされますが、成功すればリズミカルで印象的な句になります。「一月の川一月の谷の中」（飯田龍太）、「遠足や出羽の童に出羽の山」（石田波郷）、「ふだん着でふだんの心桃の花」（細見綾子）、「西国の畦曼珠沙華　曼珠沙華」（森澄雄）など、口ずさみたくなる名句がいくつも詠まれてきました。

掲句では「〜だらけ」の繰り返しによって生まれた軽快なリズムが、春という季節に弾む心や足取りと響きあっています。色とりどりの花やみずみずしい若葉、鳥のさえずりを楽しみながら行く様子が想像されます。

（えんどう・みか＝俳人）

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト　俳句てふてふは富士五湖や耶馬渓など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930（昭和5）年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら